

# 母親の内的ワーキングモデルの変容に関する研究の概観

高橋靖子\*

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

## 要 旨

本稿では、愛着の世代間伝達や個人内における内的ワーキングモデルの継続と変容の問題を扱った論文を概観した。特に両親との辛い体験を経験していても安定型の愛着を示す「獲得安定型」の母親に着目し、その関連要因について検討した。母親が養育者との過去の関係を補償する要因として、幼少期の代理対象、現在の夫婦関係や身近な人のソーシャルサポート、ライフイベント、そして環境や自他のメタ認知に関する母親の「内省機能」を取り上げて議論した。

## KEY WORDS

internal working model 内的ワーキングモデル；mother 母親；alternative support figures 代理対象；marital relationship 夫婦関係；life events ライフイベント；reflective functioning 内省機能

## 1 生涯発達における愛着（アタッチメント）

### 1. 1 愛着の発見

乳児が泣いたり甘えたりする行動には、自分自身の生存をかけた様々な重要な意味が込められている。かつては子どもの食欲などの生理的な欲求を親が満たしてやることで、初めて親子の絆が形成されるという「二次的」な動因説が優勢であった。乳児はお腹が空いて乳を求めるとあって、徐々に乳を与える対象、多くの場合は母親との間に緊密な情緒的絆ができると考えられたのである。

しかし、半世紀ほど前に行われたHarlowの子ザルの実験<sup>(1)</sup>やLorenzのインプリンティングの発見<sup>(2)</sup>より、子ザルやマガモにとって接触による心地よさや安心感への希求性が栄養摂取とは異なった重要性を持ち、生得的に備わっている「一次的」な特徴であることが示された。

動物によるこのような対象希求性が、ヒトの乳児にも同じように備わっていると考えたのがBowlby（1969 黒田他訳 1976）である<sup>(3)</sup>。Bowlbyは、特定の個体との近接関係を求め、維持しようとする傾向、またその結果確立される情緒的な絆のことを愛着（アタッチメント）<sup>(註1)</sup>と呼んだ。愛着は、温かさや親密さ、依存といった類似する概念とは異なり、危機に瀕した我が身を守るために特定の対象との接近を求めるといふ動物行動学に由来する概念であり、「ゆりかごから墓場までの、生命維持に関わる役割を果たすもの」<sup>(3)</sup>である。

### 1. 2 愛着の発達

乳児の愛着行動は、母親を追視したり、耳で居場所を確認する定位行動に始まり、微笑み、泣き、発声などといった親を呼び寄せることのできる信号行動が出現し、次第に後追いやしがみつきなどの接近行動に移行していく。乳幼児期の愛着行動の発達過程は、一定の方向性が示されており、次の4段階に分けられている<sup>(3)</sup>。

第1段階は、誕生後より生後8週より12週頃の「人物の識別を伴わない定位と発信」の時期である。この時期の乳児の弁別能力には限界があるため、母親以外の主たる養育者にも広く注意を向ける行動が生じ、その行動レパートリーとしては、追視、リーチング、微笑、泣き、発声、なん語などが見受けられる。

次いで12週頃より6か月頃までは第2段階の「1人または数人の特定対象に対する定位と発信」の時期にあたる。この時期は、愛着対象が1人か数人（母親である場合が多い）に絞り込まれてくる。視覚・聴覚的にも特定人物の特徴を弁別的に知覚し、親密な相互交渉を展開する。6か月頃より2・3歳頃までは第3段階である「発信および移動による特定対象への近接の維持」の時期にあたり、人見知りや分離不安があらわれてくる。運動能力の向上につれて、行動レパートリーも多様化し、分離場面で母親に後追いつたり再会場面で抱きついたり、母親を安全基地として探索行動を取るようになる。また、認知能力の発達により、状況に応じて自分の行動をある程度調整できるようにな

\*臨床・健康教育学系

る。

そして、3歳前後に最終段階である「目標修正的な協調性形成」の時期に至り、それ以降は特定の人物と自分に関する表象モデルが安定して機能するようになる。認知発達によって愛着対象が自分とは異なる意図や感情を持った存在であると気づき、対象の行動をある程度予測できるようになり、協調的な相互交渉を持つことが可能となる。そして、具体的な愛着行動は少なくなり、内在化した愛着対象のイメージやモデルを心のより所として他者と相互作用できるようになる。このように第4段階に至るまでに、愛着の発達は行動レベルから表象レベルへと移行していくこととなる。

愛着に関して、Bowlby (1969 黒田他訳 1976) は進化論的に適応した動機・行動の制御システムであると考えていた<sup>(3)</sup>。この愛着システムは、子どもにとって養育者との関係を通じて安心感を与えるという目標のために常に作動しており、いつでも愛着対象への接近可能性をモニターしている。子どもが探索行動を行うことができるのは、恐れや不安を感じる状況に陥っても愛着人物の応答が得られるとわかっているときであり、この拠り所は「安全基地 (secure base)」<sup>(4)</sup>と呼ばれる。

愛着システムは、どの人の発達にも標準的 (normative)、普遍的に表れるものであり、その個人差についても検討されている。愛着の個人差を測定する手段として、乳幼児を対象とする Strange Situation Procedure (以下、SSP)<sup>(4)</sup>をはじめとする観察・実験法、そして児童期には投影的手法などが開発されてきた。SSPとは、1歳児とその母親、見知らぬ女性の三者による母子分離-再会場面において、愛着対象との相互作用によって形成される子どもの愛着パターンがどのように活性化されるかを観察する方法である。具体的には、母親を安全基地として子どもが探索行動できるか、子どもが見知らぬ人にどのように関心を示すか、母親の分離や見知らぬ場所での取り残されたときに探索行動がみられるか、そして母親に対する子どもの歓迎行動がみられるかどうかといったことが観察項目となる。その結果より、分離場面では不安を示さず、再会場面での母親への接近や相互交渉を回避する回避型 (Aタイプ)、初めての場面でも、母親の存在で安心し活発に探索し、母親との接近や接触を積極的に求める安定型 (Bタイプ)、分離場面では強い不安を示し、再会場面で母親との接触を求めると同時に抵抗や怒りを示したり、探索への回復がみられないアンビバレント型 (Cタイプ) に分けられる。

さらに、Ainsworth et al. (1978) は、家庭訪問による母子相互作用の観察において、上記の愛着の個人差が養育者との関係の中で生じてきたものと仮定した。養育者の応答が回避的である場合には子どもにも回避型が多く、養育者が応答的である場合には探索行動や接近行動の活発な安定型が多く、そして養育者の応答が一貫しない場合にはアンビバレント型が多かったとの報告がなされている。つまり、子どもの愛着行動は、養育者との間で培われたある種の適応的な戦略であることが想定されているのである。その後、激しい愛着行動の後に突然回避行動が現れるなど、一貫性のない矛盾した行動を取る無秩序・無方向型 (Dタイプ) が新たに発見され、抑うつや心的外傷に苦しむ母親を持つ子どもに多くみられることが指摘されている<sup>(5)</sup>。このようにSSPの開発を契機として、母子の相互作用について注目され、後述する愛着の世代間伝達に関する研究が盛んに行われるようになった。

### 1. 3 内的ワーキングモデル概念の創出

Bowlbyは、愛着対象との具体的な経験から得られる愛着対象への近接可能性や愛着対象の情緒的応答性などに関する表象モデルを内的ワーキングモデル (以下、IWM) と呼び、人生早期の愛着パターンが生涯にわたり一定の安定性を持つと考えた<sup>(3)・(6)</sup>。IWMとは、比較行動学の視点より、動物の生存戦略において「設定目標達成のプラン作成」のために「環境についてのワーキングモデル」と「自身の行動スキルや潜在的能力についてのワーキングモデル」が必要であるとの認識に基づいて生み出された術語である<sup>(3)</sup>。

しかし、Bowlbyは人間の生涯発達におけるIWMの重要性を指摘しながらも、成人後の愛着の表現や機能の仕方について具体的に述べることはなかった。そのため、様々な研究者が、愛着体験が個人に内在化されたものとしてIWMの概念を取り上げ、その後の社会的対人関係へのあり方に及ぼす影響について論議を深めることとなった。

例えば、Main, Kaplan, & Cassidy (1985) は、愛着についてのIWMを「愛着に関連する情報の組織化における、意識的および無意識的なルール」、「愛着に関連する経験、感情、観念に関する情報探索を制御するルール」と定義した<sup>(7)</sup>。そして、愛着に関連するIWMの中で特に重要とされるのは、「愛着対象についてのIWM」であり、「自分にとっての愛着対象は誰で、助けを求めるときにはどれだけ近づきやすく、どうすればどう応答してくれるか」を予測する機能を果たすと述べている。また、「自己についてのIWM」は自分が愛着対象からいかに受容されているか、助けを与えられる人間と判断されているかといったことが中心となる。そして、自己についてのIWMと愛着対象についてのIWMは補完的に構築されるとする。例えば、接触による慰めや助けを求めたときに、愛着対象との拒否的な相互作用を繰り返すことになった子どもは、愛着対象に対して「近づいても拒否的で情緒的な反応が乏しい」

IWMを形成するとともに、「助けや接触を求めても応じてもらえない、愛される価値のない自己」といった自己のIWMを補完的に構築する。一方で、愛着対象についてのIWMが安定している子どもは、親との関係以外の環境でも高い信頼や自尊感情をもって交渉できるため、仲間や他の大人に対しても、一貫して安定した愛着行動を維持できることが想定されている。

#### 1. 4 内的ワーキングモデルの測度

前述のように乳幼児期にはSSPをはじめとする観察や投影法的な手法が中心となっているが、青年期以降にはAdult Attachment Interview (以下、AAI)<sup>(8)・(9)</sup>が開発されたことにより、愛着が内在化された表象レベルにおける測定が行われるようになった。そこで、AAZの概観とその課題について述べることにする。

Main & Goldwyn (1984/1998) は、父母子の縦断研究において乳児期のSSPを実施し、両親への面接を行う中で親の語り口の特徴を発見した<sup>(9)</sup>。そこで、面接記録を乳児の愛着パターンで分類し、各パターンにおいて共通する語りの特徴を抽出した。乳児の愛着パターンをブラインドにした状態で、養育者の面接記録による分析のみで乳児の愛着パターンを予測できることを見出した<sup>(10)</sup>。その後、養育者の語りの分類はマニュアルの版を追うごとにSSPのタイプと対応するように精緻化されている。

AAIは幼児期の両親あるいは代わりの養育者との愛着体験の記憶、現在の対人関係への影響、現在の愛着関係全般に対する態度などについて想起を求める所要時間1時間程度の半構造化面接である。幼少期の両親あるいは代わりの養育者との被養育体験を思い出させながら、現在の評価について尋ねる。具体的な質問として、①乳幼児期における両親との関係を最もよく表現すると思われる形容詞とそれについての思い出、②両親から拒否されたり脅されたりしたことがあったか、③なぜ両親はそのようにふるまったと思うか、④両親と自分との関係は幼い頃よりどのように変わってきたか、⑤幼い頃の経験が現在の自分にどのように影響を与えているかといった項目から構成される。

面接は逐語記録に起こされた後に、親との愛情的な結びつき、拒否、役割逆転の有無などの「過去の愛着経験についての性質」、および親の理想化、怒りへのとらわれ、侮蔑、想起の困難、そして談話内容の一貫性といった「現在の心的状態」からなる16のスケールによって評定され、最終的には以下の4つのカテゴリーに分類される。面接で語られる内容だけでなく話の一貫性や面接態度についても分析の対象として、個人を4つのタイプに分ける。すなわち、①安定自律型 (F型: 愛着関係に価値をおいており、描写や評価が一貫している)、②愛着軽視型 (Ds型: 愛着経験にほとんど価値をおいておらず、一般化された愛着についての表象も実際はエピソードと矛盾している、あるいは想起できない)、③とらわれ型 (E型: 怒りの表出や極端に長い語りで、現在も愛着関係に過剰にとらわれている)、④未解決型 (U型: 虐待や喪失の話になると意味づけや会話のモニタリングが著しく欠ける) である。評定基準においては、会話の公準 (cooperative principle) に依拠しているのが大きな特徴である。会話の公準とは、言語哲学者のGriceによって公式化された4つの法則で、真実性に富んでおり語られた内容の根拠があること (質: quality)、簡潔かつ完全であること (量: quantity)、問いと関連することが適切に語られていること (関連性: relevance)、明瞭で秩序だっていること (様式: manner) である<sup>(11)</sup>。

AAIの信頼性・妥当性について、欧米ではおおむね検証されており、知能や発話スタイルとは有意に関連しないとの報告がある<sup>(12)</sup>。しかし、社会的望ましさや一般的な語りのスタイルとは関連しない一方で、知能や現在の全般的な社会的適応とは有意に関連するとの報告も見受けられる<sup>(13)</sup>。Sagi, van IJzendoorn, Scharf, Koren-Karie, Joels, & Maysel (1994) は、大学生におけるAAIが、愛着とは無関係な記憶力や知的能力とは関連しないことを報告しており<sup>(14)</sup>、AAIで測定されるIWMと知能との関連については一貫していない。

日本においては、数井・遠藤・田中・坂上・菅沼 (2000) が関東地方の母親を対象にAAIを実施し、安定自律型の場合には幼児の愛着行動や情動制御がポジティブであることを見出している<sup>(15)</sup>。また、Behrens, Hesse, & Main (2007) は、札幌近郊の母子を対象とした調査によって、AAIによる母親の未解決型と分離再会場面における6歳児の無秩序・無方向型との間に関連がみられたことより、日本における母子の愛着の世代間伝達について欧米に準じた方法で測定できることを報告している<sup>(16)</sup>。これらの結果によって、日本においてIWMの測定としてAAIを用いること、そして親子の愛着の世代間伝達を測定することの妥当性については概ね了解されたといえる。しかし、AAIにおけるとらわれ型の怒りや受動的な態度に関する評定、そして未解決型における時制の混乱した語りなどの異文化妥当性については未だ検討課題として残されている。



## 2 世代間伝達の問題

### 2. 1 世代間伝達とは

基本的に個人に内在化された愛着には時間的な安定性があり、幼少期と成人してから示す個人の愛着表象もしくは愛着スタイルの間には一定の対応性が想定されている。したがって、乳幼児のSSPにおける愛着行動の組織化と、成人の愛着に関する言語・思考や記憶のパターンの組織化の間は並行関係であると仮定された<sup>(7)</sup>。Main et al. (1985)によって両親のAAIと乳児の愛着の安定性との間での有意な関連が確認されたのを端緒に、愛着の世代間伝達に関する根拠として養育者自身のAAIと子どもの愛着行動との関連性が検討されるようになった<sup>(7),(17),(18)</sup>。Fonagy et al. (1991)は、出生後の母子の相互作用による影響を避けるために、妊娠中の親にAAIを実施し、その分類と生後1年の子どものSSPによる愛着パターンの対応について、2分類（母子の安定型とそれ以外の型をまとめた不安定型）では75%、3分類（安定自律型と安定型、愛着軽視型と回避型、とらわれ型とアンビバレント型）では66%を予測することを見出している<sup>(18)</sup>。van IJzendoorn (1995)のメタ分析による分析では、13の研究に基づいて乳児と親の愛着の3分類との一致率を算出したところ70%を示し、9つの研究データに基づいた4分類（3分類に未解決型と無秩序・無方向型の組み合わせを加えたもの）の一致率は63%を示し、高い割合で愛着が伝達される事実が明らかとなっている<sup>(19)</sup>。

さらに、母親の愛着表象がどのようにして子どもの行動へと伝達されるのかという世代間伝達のメカニズムについても検討されている。SSPを開発したAinthworth et al. (1978)は、母親の「感受性のある応答」について、乳児の愛着に関連する母親の行動で最も重要な側面であると説明している<sup>(4)</sup>。また、Main et al. (1985)によれば、世代間伝達とは乳児の愛着に関連する信号が親の意識の潜在下において愛着についてのIWMを活性化させることに由来するという<sup>(7)</sup>。親が子どもの表出する信号に対して、防衛的にならずに容易にアクセスできる場合には、子どもは情動をありのままに表出することができる。しかし、親が不幸な記憶を想起しないように子どもの信号を回避する場合には、子どもは情動表出を抑制するようになり、あるいは親が過去へのとらわれから一貫しない反応を示す場合には、子どもは信号を最大化するような情緒表出を行うようになると説明している。

そして、それぞれの親の応答性に順応する形で形成された子どもの防衛スタイルは、幼少期だけでなく成人期まで継続することが想定される。これらの防衛スタイルとして、1つには自分の感情にあまり目を向けず、愛着対象に非現実的な評価やイメージを抱くようになる「愛着欲求の最小化」による防衛スタイル、さらにもつれ絡まった心的状態となり、自分の感情や愛着対象の有効性を妥当に判断できなくなる「愛着欲求の最大化」による防衛スタイルが挙げられる。IWMを活性化させるストレス要因は、個人内要因（空腹、痛み、疲労、病気）、環境要因（不安を喚起するできごと）、対人関係要因（愛着対象の長期的な不在、愛着対象による近接の拒否）など様々である<sup>(20)</sup>。高ストレスの状況に陥った場合に、最大化あるいは最小化された方略いずれにしても過度に強固な防衛スタイルを身につけていると、他者のサポートや環境の資源を適切に利用できず、不安や苦痛を和らげることができない機会が増えると考えられる。したがって、養育者との間に安定した愛着を育めないような場合には、このような対人・情動的な防衛によって、幼少期の対人不適応の問題、さらには成年期の精神病理の問題、あるいは自身が養育者となったときの子どもの養育行動の問題が生じることが想定され、今日まで多くの検証が行われている<sup>(21)</sup>。

### 2. 2 伝達ギャップの問題

前節で述べたように親の愛着表象と乳児の愛着の安定性との関連や、その後の不適応の問題への連鎖を示す証拠は豊富に示されている。しかし、全てのケースについて同じように世代間伝達される訳ではなく、実際にはFonagy, Steele, & Steele (1991)やvan IJzendoorn (1995)のデータで3割近くが伝達されていなかった<sup>(18),(19)</sup>。また、van IJzendoorn (1995)は、「親の心的状態（IWM）が子どもの愛着に対して応答性以外の伝達経路を通して及ぼした影響」が、低いながらも一定の効果量（.36）で示されたことを重視した<sup>(19)</sup>。親から子どもへの世代間伝達が直接伝達しない、あるいは世代間伝達が母親による感受性を經由しないといた現象は「伝達のギャップ（transmission gap）」として検討課題とされている。

伝達ギャップの課題を解決するため、Fonagy & Target (1997)は、自他を含めた個人の行動について情緒や信念、欲求などの観点から妥当に解釈できる心的能力である「内省機能（reflective functioning）」に着目した<sup>(22)</sup>。そして、Fonagy, Steele, Steele, Higgitt, & Target (1994)は母親が幼少時の辛い被養育体験を自発的に報告した事例を取り上げ、母親の内省機能の高さが子どもの安定型と関連することを示した<sup>(23)</sup>。また、Slade, Grienenberger, Bernbach, Levy, & Locker (2005)は40組の母子のペアを対象に調査を行い、親発達面接で測定された母親の内省機能とAAIの間に、さらには内省機能と乳児の愛着との間に有意な関連を示している<sup>(24)</sup>。Grienenberger, Kelly, &

Slade (2005) は、45組の母子を対象に母親の内省機能および行動との関連を検討したところ、母親の内省機能が母親の行動を媒介して母子の関係性と関連することを見出した<sup>(25)</sup>。さらに、不安定型の愛着の伝達において、母親が子どもの愛着行動の意味を誤って解釈したために、攻撃的で侵入的な行動や脅えて引きこもるような行動を取ることが影響すると示唆した。これらの結果を受けて、近年では愛着の伝達において母親の感受性よりも内省機能が中心的な役割を果たすと考えられるようになってきている。

### 3 内的ワーキングモデルの変容

#### 3. 1 内的ワーキングモデルの変容に関する要因

それでは、発達早期に愛着対象との間に形成されたIWMは、その後の人生においてどの程度の影響力を持ち、個人内での変容可能性を有するのであろうか。この問いに関して、実際に成人が過去に養育者とのどのような愛着を経験してきたかに関心が持たれ、行動レベルと表象レベルの連続性やその変容の可能性について検証されている。

Bowlby (1973 黒田他訳 1977) によれば、愛着対象と自己についてのIWMは乳幼児期から青年期にかけて徐々に形成される<sup>(3)</sup>。そして、IWMの構成は人生初期の感覚運動的なものから言語的なものに移行していく。そのため、言語感覚的な記憶に対して意識的にアクセスすることが困難となり、IWMの変容は生じにくくなると考えられる<sup>(26)</sup>。したがって、個人に内在化された愛着は基本的には時間的な安定性を持ち、幼少期と大人になってから示される愛着スタイルや愛着表象の間には対応関係が想定される<sup>(7)</sup>。

しかしその一方で、Bowlby (1973 黒田他訳 1977) やMain et al. (1985) は、IWMが鋳型のように固定されたものではなく、青年期の認知発達において形式的操作の段階に至ることや新たな愛着対象との関係が重要になることによって変容が可能であると想定している<sup>(3),(7)</sup>。従来の愛着研究はIWM概念の連続性を強調しがちであったが、「被養育体験を元とする表象モデルが、ソーシャルサポートや環境に潜むストレスなど、その時々の実現の状況に接してどう変化し、再体制化されるかという視点」(p.214)<sup>(27)</sup>が、臨床的介入を考える上で今後一層の重要性を増すと考えられる。

このような個人内における愛着パターンの時間的連続性あるいは不連続性を検証する縦断研究が進められている<sup>(10)</sup>。例えば、Waters, Merrick, Albersheim, & Treboux (2000) によれば、アメリカの中流階級の調査対象者に乳児期にSSP、20年後にAAIを実施した。その結果、2分類(安定・不安定型)での一致率は72%、3分類での一致率は64%となった<sup>(28)</sup>。不一致だった青年の多くは、18歳までに親の死や離婚、親や自分の生死に関わる病気、親の精神障害、身体・性的虐待を経験していた。そこで、Waters et al. (2000) は、このような不幸なライフイベントに遭遇した人とそうでない人に分けて愛着の一致率を確認したところ、不幸な出来事に遭った人のうち44%は愛着の型が変化し、経験していない人は22%の変化率であることを示した。これらの結果は、発達早期の愛着の持続性のある程度実証するものであるが、その一方で臨床的援助の視点より、後年の出来事の影響による変容の可能性も考慮する必要性を示唆している。

個人を取り巻く環境について目を向けると、Waters et al. (2000) が示すように、大きなライフイベントは愛着パターンが変容する契機となりやすい<sup>(28)</sup>。契機となりうるライフイベントとして、親の死や離婚、親や自分の生死に関わる病気といったネガティブな事象だけでなく、結婚や出産といったどちらかといえばポジティブなイベントについても検討されている。結婚後にAAIがどのように変容したかについて、結婚生活に満足している場合は、愛着表象が安定型に変容するという報告が多い<sup>(29),(30)</sup>。夫婦関係に関する研究においても、妻を対象として自身の親および現在のパートナーに関する愛着表象を測定したところ、結婚3か月前から結婚18か月後に妻の78%が同じAAIの型で連続していたものの、その一部については変容を遂げており不安定型から安定型への移行が多くみられたことが報告されている<sup>(31)</sup>。また、母親のAAIが安定型であると、良好な母子相互作用が生じて子どもの愛着安定型に関連することと、不安定型の母親であっても夫婦関係の適応が良い場合には子どもの安定型が高くなることが示されている<sup>(32)</sup>。これらの結果より、結婚や出産によるパートナーとの関係形成やソーシャルネットワークの出現は、母親のIWMを変容させる要因となり、さらには子どもとの相互作用にも影響を及ぼすことが予測される。

他にもIWMの変容に関連する要因として、愛着対象との関係についてメタ認知能力や内省能力を働かせることができるかという認知的な側面が重視されている<sup>(26)</sup>。Main (1991) は、メタ認知能力の中でメタ認知モニタリングを取り上げて、「自分の取るべき行動を計画し、プロセスを監視し、結果のチェックをする認知過程であり、思考や観念の矛盾に気がついたときに自分の認識を自ら調整し直す過程である」と定義づけた。そして、親によって安定型と判断された子どもが、不安定型と判断された子どもより、「自分や他者の考えの表象的な性質を理解する能力」、すな

わち愛着に関連した経験のメタ認知知識とメタ認知モニタリングが優れていることを示し、幼児の安定型の愛着行動がメタ認知的な能力の発達と関連することを示唆している<sup>(26)</sup>。さらに、Fonagy (1991) は、成人のメタ認知能力の個人差について「内省自己 (reflective self)」として定義し、自己と他者の意図性の存在や心的状態について理解する話者の内省自己のあり方についてAAIより評定した。その結果、母親の「内省自己」得点がAAIの「思考の一貫性」得点と強く関連するだけでなく、「一貫性」得点以上に乳児の愛着の安定型を予測できることを見出している<sup>(33)</sup>。そして、「メタ認知的コントロールは、子どもが極端に望ましくないパターン、虐待や外傷にさらされるときに特に重要である。他者の心的状態を知ることができる子どもは、親の拒否が誤った信念に基づくものであることを知覚することができ、ネガティブな経験を修正することができる<sup>(34)</sup>と説明している。これらのことより、前節で述べた愛着の世代間伝達の伝達において、内省機能が有効な媒介要因となるだけでなく、個人内のIWMの変容過程においてもポジティブな効果をもたらすものと考えられる。

### 3. 2 “獲得された安定型”の定義とその機能

前節で述べたように個人内のIWMの連続性やその変容については乳幼児期から青年・成人期にかけて大規模な縦断調査が行われてきた。縦断研究は現在の相互作用に関わらず因果関係を明らかにできるという利点があるが、時間・経済的なコストがかかる。そこで、「獲得された安定型」(以下、獲得安定型: earned security)<sup>(9)</sup>のように、「親との間に非応答的な経験をしてきたにも関わらず、バランスのとれた視点で統合して語ることができる」タイプについて着目されるようになった。それというのも、獲得安定型が親となったときに、初めから安定型であった「継続安定型 (continuous security)」と比べて、子育てにおいて大きな困難が生じないことが示されてきたためである<sup>(35)・(36)</sup>。

Grossmann et al. (1988) は、支持的な親や外傷体験のない母親であれば、愛着のモデルが良好であり、子どもとも安定した関係が持てるとした一方で、不幸な愛着経験を持つ母親が子どもと現在の愛着関係に必ずしも否定的な影響を及ぼすものでないことを示唆している。そして、否定的な母子関係が伝達されるのは、母親が自分の過去を受容せず、愛着に関する情報に防衛的な態度をとり続けている場合だとしている<sup>(17)</sup>。実際に、獲得安定型は不安定型および継続安定型より内省機能が高いことが示され<sup>(35)</sup>、メタ認知あるいは内省自己の働きによって過去の表象を修正してきたことが考えられる。

今まで行われた獲得安定型に関する主要な研究について、調査対象および獲得安定型の定義、得られた結果をまとめて表1に示す。Main & Goldwyn (1984/1998) はAAIのスコアリング・マニュアルにおいて、獲得安定型の定義を「父親の愛情および母親の愛情がともに3点以下」と定義している<sup>(9)</sup>。それ以降の研究において過去の養育者との経験に関する主要なAAIのサブスケールである「母親(父親)の愛情」、「母親(父親)の拒否」、「母親(父親)のネグレクト」が主に用いられてきたものの、その定義については一貫していない<sup>(35)・(41)</sup>。

新たな展開として、Roisman et al. (2002) は23年間の縦断研究において、2つの定義による獲得安定型、すなわち1つは成人期のAAIに基づきPearson et al. (1994) の分類方法<sup>(35)</sup>に相当する「回顧的定義による獲得安定自律型」と、もう1つは幼児期のSSPでは不安定型だったものの成人期AAIでは安定自律型に転じた「予測的定義による獲得安定型」を抽出した<sup>(39)</sup>。結果として、「回顧的定義による獲得安定型」は幼少期や思春期に実母からの支持的で一貫した適切な養育を受けていた。さらに、「回顧的定義による獲得安定型」は、幼児期より一貫して抑うつが高く、それと同時期に実母の抑うつも高かったことが報告された。これを受けて、Roisman et al. (2002) はAAIによって否定的な経験が多く語られるのは、抑うつであるために否定的な認知バイアスが働いている可能性を挙げている。さらに、「回顧的定義による獲得安定型」の実母が抑うつを呈しているも、実母の愛着に関する心の状態(IWM)が安定していたために、IWMが子どもとの関係で保護要因となった可能性について指摘している<sup>(39)</sup>。

しかし、Saunders, Jacobvitz, Zaccagnino, Beverung, & Hazen (2011) やZaccagnino et al. (2012) はより厳密に安全獲得型を定義づけて、抑うつを統制した上で母親のAAIと子どもの愛着を測定した。それでもなお、獲得安定型の母親の子どもの愛着において安定型が多かったことにより、「回顧的定義による獲得安定型」が抑うつの影響によるものとするRoismanらの説に反論している<sup>(40)・(41)</sup>。このようにAAIの獲得安定型については抑うつとの関連が議論される中で、その存在意義についても問われている。

一方、近年の獲得安定型に関する研究においては、幼少期の養育者と同様かそれ以上のサポート源となる対象として、「代理対象」(“alternative support figures”<sup>(40)</sup>、“alternative caregiving figures”<sup>(41)</sup>)の働きが指摘されている。子どもにとって主たる養育者以外の重要な他者(多くは祖父母)が代理対象として獲得安定型に果たす役割やその子どもへの態度に及ぼす影響について、Saunders et al. (2011) は獲得安定型が過去に代理対象からの情緒的サポートを多く受けており、セラピーを受ける時間が長かったことを報告している<sup>(40)</sup>。

安定型と不安定型の関係については不連続というより一つの「連続体」<sup>(42)</sup>として捉えられるが、不安定型より獲得



安定型への移行において、修正的情動体験やさまざまな重要な他者と関係を結ぶ経験を積みながら、さらに内省機能といった個人的資源を利用しながら、過去の経験の表象を概観し再構成するようになり、より広く先を見通す能力を獲得できることが予測される。

表 1 獲得安定型に関する研究のまとめ

著者	発行年	調査地	対象	獲得安定型の定義	出現頻度	主要な結果
Pearson et al. <sup>(35)</sup>	1994	アメリカ	就学前の児童と母親40組	F1, F2, F3b, F4, F5 (安定自律型サブカテゴリー)	継続安定型 25%(10名) 獲得安定型 50%(20名) 不安定型 25%(10名)	・獲得安定型は不安定型より乳児の愛着安定型が多い ・獲得安定型40%, 継続安定型10%, 不安定型30%に抑うつ陽性が出現 ・獲得安定型と継続安定型で子どもの養育スタイルに差がみられず
Crandell et al. <sup>(36)</sup>	1997	イギリス	就学前の児童と母親36組	F3a, F4a以外の安定型で、少なくとも1人の親の愛情が5点未満、もしくは拒否、ネグレクト、役割逆転で5点以上	AAIQ (AAI質問紙) による 継続安定型 25% (9名) 獲得安定型 31% (11名) 不安定型 44% (16名)	・獲得安定型で不安定型より乳児への関わりにおいて母親の情緒の表出が多く、自律性を促進する
Phelps et al. <sup>(37)</sup>	1998	アメリカ	中流から労働者階級の母親126名とその第一子	少なくとも一人の親の愛情が5点以下、かつ拒否かネグレクトが5点以上	継続安定型 35.5% (43名) 獲得安定型 26.4% (32名) 不安定型 38.0% (46名)	・獲得安定型と継続安定型にポジティブな子どもの養育の差がみられず
Paley et al. <sup>(38)</sup>	1999	アメリカ	138組の夫婦	一人の親の愛情が5点未満、もしくは拒否、ネグレクト、役割逆転のいずれかが5点以上	継続安定型 妻: 35%, 夫: 30% 獲得安定型 妻: 22%, 夫: 15% 不安定型 妻: 43%, 夫: 55%	・継続安定型の夫を持つ妻は、愛着軽視型や獲得安定型の夫を持つ妻より、ポジティブな夫婦間行動を示す
Roisman et al. <sup>(39)</sup>	2002	アメリカ・ミネアポリス	268名の母と第一子	回顧的定義による獲得安定型はPearson et al. (1994)に同じ、および予測的定義による獲得安定型(幼児期のSSPと成人のAAIの組み合わせによる)	継続安定型 14.4% (22名) 獲得安定型 15.7% (24名) 不安定型 69.9% (107名)	・回顧的獲得安定型と継続安定型の間に、乳児期の不安、支持的な養育体験の差がみられず ・予測的獲得安定型は成人後に親密な関係が良好である
Saunders et al. <sup>(40)</sup>	2011	アメリカ・テキサス	母親121名	Main et al. (1984/1998) にならって両親の愛情が3点以下	継続安定型 48% (58名) 獲得安定型 13% (16名) 不安定型 39% (47名)	・獲得安定型は不安定型より乳児の愛着安定型が多い ・獲得安定型は attachment support figure による情緒的サポートおよびセラピーを受けた時間が多い
Zaccagnino et al. <sup>(41)</sup>	2013	イタリア北部	幼稚園児の母親94名	両親の愛情ともに3.5点以下	継続安定型 37% (35名) 獲得安定型 20% (19名) 不安定型 43% (40名)	・獲得安定型は attachment caregiving figure による情緒的サポートが多い ・獲得安定型は継続安定型・不安定型に比べて内省機能が高い

#### 4 今後の内的ワーキングモデルの変容に関する研究の方向性

Bowlby (1969 黒田他訳 1976) の提唱した愛着の概念は、半世紀以上にわたって発達・臨床心理学分野における母子保健や社会福祉、教育といった援助サービスの領域において活用されている。成人期における愛着は、生涯にわたって個人の対人関係の持ち方に影響を与えるIWM<sup>(3)</sup>として捉えられ、Main & Goldwyn (1984/1998) のAAI<sup>(9)</sup>の開発によって、愛着の世代間伝達の問題から精神病理との関連に至る幅広いテーマで多くの実証研究が蓄積されてきた。本論文では、世代間伝達や個人内でのIWMの一貫性と変容に関する研究の概観より、愛着の個人内外の連続性および不連続性のメカニズムを解明するために、個人内の様々な発達過程や対人リソースについて検討する必要性を示した。個人内でIWMが変容する要因や、養育者のIWMから子どもへの感情、養育態度に至るメカニズムには未だ不

明な点が多い。そして、欧米では盛んなAAIに関する研究も、日本での研究は文化的妥当性や使用の煩雑さなどにより数少ないという課題が残されている。

以上の問題意識より、今後養育者のIWMの変容に関して、妊娠時より形成される養育者と子どもの早期の関係性に目を向け、複合的な要因に基づいたモデルを作成し、検証することが必要である。特に実親との辛い体験を経験していても安定型を示す「獲得安定型」に着目し、IWMの変容との関連要因として過去の代理対象、現在の夫婦関係や身近な人のソーシャルサポート、結婚や出産などのライフイベント、さらにはこれらの関係やイベントをどのように受け取るかという個人内の内省機能を取り上げ、IWMとの間にどのような相互作用を生じるのかについての包括的な検討が求められる。

子どものIWMが主要な養育者との関係のみで決定されるというよりも、幼少時の年長者との情緒交流や良きパートナーの存在との相互作用が示唆されるならば、養育者との別離や代理親の問題、被養育体験に起因する苦悩に対する心理的援助において有益な知見を提供できることが期待される。

## 注

- 1) 日本において「愛着 (attachment)」は広義の「情緒的絆」として用いられることが多いが、Bowlbyの原義に立ち戻るならば「アタッチメント」の表記が望ましい<sup>(43)</sup>。しかし、本論文では臨床実践で定着した用語として、そのまま「愛着」を用いる。

## 引用文献

- (1) Harlow, H. F. (1958). The nature of love. *American Psychologist*, 13, 673-685.
- (2) Lorenz, K. (1960). *King Solomon's Ring*. Florida: Routledge (ローレンツ, K. 日高敏隆 (訳) (1998). ソロモンの指環 - 動物行動学入門 早川書房)
- (3) Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1 Attachment*. New York: Basic Books. (ボウルビー, J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子 (訳) (1976). 母子関係の理論 I : 愛着行動 岩崎学術出版社)
- (4) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Oxford, England: Lawrence Erlbaum.
- (5) Main, M. & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years: Theory, research, and intervention*. Chicago, IL: University of Chicago Press. pp.121-160.
- (6) Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2 Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (ボウルビー, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論 II : 分離不安 岩崎学術出版社)
- (7) Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Walters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the society for research in child development*. 50 (No.1-2, Serial No.209), Chicago: University of Chicago Press, pp.66-104.
- (8) George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1996). *Adult Attachment Interview* (3rd ed.). Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkeley.
- (9) Main, M. & Goldwyn, R. (1984/1998). *Adult attachment scoring and classification system*. Ver. 6.3. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley, Department of Psychology.
- (10) Hesse, E. (1999). The Adult Attachment Interview: historical and current perspectives. In J. Cassidy, & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. New York: Guilford Press. pp.395-433.
- (11) Grice, P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics, Vol.3 Speech acts*. New York: Academic Press. pp.41-58.
- (12) Bakermans-Kranenburg, M. J. & van IJzendoorn, M. H. (1993). A psychometric study of the Adult Attachment Interview: Reliability and discriminant validity. *Developmental Psychology*, 29(5), 870-879.
- (13) Crowell, J. A., Waters, E., Treboux, D., O'Connor, E., Colon-Downs, C., Feider, O., Golby, B., & Posada, G. (1996). Discriminant validity of the Adult Attachment Interview. *Child Development*, 67(5), 2584-2599.
- (14) Sagi, A., van IJzendoorn, M. H., Scharf, M., Koren-Karie, N., Joels, T., & Mayseless, O. (1994). Stability and discriminant validity of the Adult Attachment Interview: A psychometric study in young Israeli adults. *Developmental Psychology*, 30(5), 771-777.
- (15) 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学



- 研究, 48(3), 323-332.
- (16) Behrens, K. Y., Hesse, E., & Main, M. (2007). Attachment status as determined by the Adult Attachment Interview predicts their 6-year-olds' reunion responses: A study conducted in Japan. *Developmental Psychology*, 43(6), 1553-1567.
  - (17) Grossmann, K., Fremmer-Bombik, E., Rudolph, J., & Grossmann, K. E. (1988). Maternal attachment representations as related to patterns of infant-mother attachment and maternal care during the first year. In R. A. Hinde, & J. Stevenson-Hinde (Eds.) *Relationships within families: Mutual influences*. Oxford: Oxford Science Publications. pp.241-260.
  - (18) Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. (1991). Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62(5), 891-905.
  - (19) van IJzendoorn, M. H. (1995). Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, 117(3), 387-403.
  - (20) Simpson, J. A. & Rholes, W. S. (1994). Stress and secure base relationships in adulthood. In K. Bartholomew & W. S. Pholes (Eds.), *Advances in personal relationships Vol.5: Attachment processes in adulthood*. London, UK: Kingsley. pp.181-204.
  - (21) 北川 恵 (2005). アタッチメントと病理・障害 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント-生涯にわたる絆- ミネルヴァ書房 pp.245-262.
  - (22) Fonagy, P. & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9(4), 679-700.
  - (23) Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Higgitt, A., & Target, M. (1994). The Emanuel Miller Memorial Lecture 1992: The theory and practice of resilience. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 35(2), 231-257.
  - (24) Slade, A., Grienenberger, J., Bernbach, E., Levy, D., & Locker, A. (2005). Maternal reflective functioning, attachment, and the transmission gap: A preliminary study. *Attachment & Human Development*, 7(3), 283-298.
  - (25) Grienenberger, J., Kelly, K., Slade, A. (2005). Maternal reflective functioning, mother-infant affective communication, and infant attachment: Exploring the link between mental states and observed caregiving behavior in the intergenerational transmission of attachment. *Attachment & Human Development*, 7(3), 299-311.
  - (26) Main, M. (1991). Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) model of attachment. In C. M. Parkers, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris. (Eds.), *Attachment across the life cycle*. London and New York: Routledge. pp.127-159.
  - (27) 遠藤利彦 (1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
  - (28) Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, 71(3), 684-689.
  - (29) Davila, J., Karney, B. R., & Bradbury, T. N. (1999). Attachment change processes in the early years of marriage. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(5), 783-802.
  - (30) Rholes, W. S., Simpson, J. A., Campbell, L., & Grich, J. (2001). Adult attachment and the transition to parenthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81(3), 421-435.
  - (31) Crowell, J. A., Treboux, D., & Waters, E. (2002). Stability of attachment representations: The transition to marriage. *Developmental Psychology*, 38(4), 467-479.
  - (32) Eiden, R. D., Teti, D. M., & Corns, K. M. (1995). Maternal working models of attachment, marital adjustment, and the parent-child relationship. *Child Development*, 66(5), 1504-1518.
  - (33) Fonagy, P. (1991). The capacity for understanding mental states: The reflective self in parent and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, 12(3), 201-218.
  - (34) Fonagy, P. (1996). The significance of the development of metacognitive control over mental representations in parenting and infant development. *Journal of Clinical Psychoanalysis*, 5(1), 67-86.
  - (35) Pearson, J. L., Cohn, D. A., Cowan, P. A., & Cowan, C. P. (1994). Earned- and continuous-security in adult attachment: Relation to depressive symptomatology and parenting style. *Development and Psychopathology*, 6(2), 359-373.
  - (36) Crandell, L. E., Fitzgerald, H. E., & Whipple, E. E. (1997). Dyadic synchrony in parent-child interactions: A link with maternal representations of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, 18(3), 247-264.
  - (37) Phelps, J. L., Belsky, J., & Crnic, K. (1998). Earned security, daily stress, and parenting: A comparison of five alternative models. *Development and Psychopathology*, 10(1), 21-38.
  - (38) Paley, B., Cox, M. J., Burchinal, M. R., & Payne, C. C. (1999). Attachment and marital functioning: Comparison of spouses with continuous-secure, earned-secure, dismissing, and preoccupied attachment stances. *Journal of Family Psychology*, 13, 580-597.
  - (39) Roisman, G. I., Padro'n, E., Sroufe, L. A., & Egeland, B. (2002). Earned-secure attachment status in retrospect and prospect. *Child Development*, 73(4), 1204-1219.
  - (40) Saunders, R., Jacobvitz, D., Zaccagnino, M., Beverung, L. M., & Hazen, N. (2011). Pathways to earned-security: The

- role of alternative support figures. *Attachment & Human Development*, 13(4), 403-420.
- (41) Zaccagnino, M., Cussino, M., Saunders, R., Jacobvitz, D., & Veglia, F. (2012). Alternative caregiving figures and their role in adult attachment representations. *Clinical Psychology and Psychotherapy* DOI: 10.1002/cpp.1828
- (42) Roisman, G. I., Fraley, R. C., & Belsky, J. (2007). A taxometric study of the Adult Attachment Interview. *Developmental Psychology*, 43(3), 675-686.
- (43) 遠藤利彦 (2005). アタッチメントと温かさ(warmth) 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントー生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房 pp.21-23.

# Changes in mothers' internal working models: a review

Yasuko TAKAHASHI\*

## ABSTRACT

In this paper, previous studies examining attachment transmission, and consistency and change of internal working models (IWMs) were reviewed. Special attention was given to "earned security" mothers who exhibited secure attachment to their children regardless of previous harsh experiences with their own parents. Mothers may compensate for the effects of previous difficult experiences with their parents in several ways, for instance, obtaining support from alternative support figures during childhood, obtaining support from their current marital relationship or from close social relationships, or through adaptive "reflective functioning," a term which refers to the nature of the mothers' meta-cognition of themselves, others, and their environment. These ways of compensating were discussed.

---

\* Clinical Psychology, Health Care and Special Support Education